

「愁鬢詞」本文校定：活字本の危うさ

後藤，昭雄
成城大学教授

<https://doi.org/10.15017/10289>

出版情報：語文研究. 103, pp.1-9, 2007-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「愁鬢詞」本文校定

—活字本の危うさ—

後藤昭雄

の句切りを誤っていることを指摘した（後述）。しかし、底本（影印本）と対比してみると、それだけでなく、翻刻、句読には少なからぬ誤りがある。これを訂して正しい本文を提示することが本論の目的である。

二

「愁鬢詞」には序がある。その序とともに「愁鬢詞」の国史大系本の本文を示すと、次のとおりである（右に付した×については後述）。

平安末期に三善為康によって編纂された『朝野群載』は、三十卷（現存二十一卷）のうち、巻一―三を「文筆」上中下として、平安朝に制作された漢詩文を収載する。文体ごとにまとめられていて、その一つに「辞」（巻一）があり、三首が引載されているが、そのなかの一首に「愁鬢詞并序」がある。

今、我々が『朝野群載』所収作品を読む時は、ほぼ間違いなく新訂増補国史大系本（以下、国史大系本）に拠ると思われる。以前に、平安朝漢文の文体研究という視点から、文筆部の諸作品を概観したが、その時は、国史大系本は「愁鬢詞」

愁鬢詞并序

木工助藤敦隆

愁歎之者傷^レ情。令^ニ形^一早考。苦辛之者必損^レ性。令^ニ氣^一先

衰。予_レ倫_レ屈_レ年久。豈不_レ傷_レ情乎。風痺日積。豈不_レ損_レ性乎。是故未_レ及_二廿九_一。同_二顔子之類_一。亦先_二卅_一。類_二潘郎之鬢_一。況乎漸過_二強仕_一也。近_二知命_一。從_二霜成_一雪。變_レ斑爲_レ白。滿鏡撩乱矣。訝_二黑翟之見_一。然隨_レ梳灑落焉。似_二皓鸞之振_一。甚矣予之衰也。其奈老之至何。仍聊祝_二素髮於茶花_一。述_二怨諸於言葉_一云_レ尔。

聞説愁人鬢早衰。不_レ行_レ年悲哉。年亦老。滿頭弥_レ皤然。

この本文の底本は猪熊本と称される古写の善本である。現在は國學院大學所蔵。国史大系本の凡例に次のようにある。

猪熊信男氏所蔵本は卷第一のみにして、卷子本、天地界のみありて、鎌倉時代の初期を下らざるものにして、流布の諸本に逸せる所を存して頗る原形に近きものと謂ふべし。

国史大系本は卷一はこの猪熊本を底本としているが、本書は早く一九二六年に「古簡集影」（東京帝国大学史料編纂掛編）の一冊として影印本が刊行されている。なお「愁鬢詞」は凡例にいう「流布の諸本に逸せる所を存して」いるうちの一首である。つまり猪熊本にのみある。

「古簡集影」によって猪熊本「愁鬢詞」の書影を示す（次頁）。

先に示した国史大系本の本文で、右にxを付したものは翻刻の誤りである。猪熊本の影印に、これに該当する文字に右に傍線を付し、ア・イ以下の記号を付けた。一つずつ検討して正しい本文を定めていこう。

(1) 影印3行目のアとイ、これは関連する。国史大系本はどちらも「令」と読む。以下、くずし字の例示は、北川博邦編「日本名跡大字典」（角川書店、一九八一年）を用いるが、アはその「令」のくずし字、図版aのような字形と判断したのである。そうすると、イも同じ「令」

のくずし字と見ることになるが、まず字形がアと異なるうえ、これを一字と見るには



行末の空白があり過ぎる。なお、図版にすると白くなってしまつが、影印で見ると、ここは虫損によって文字が欠けているのである。イは（またアも）一字ではなく二字と考えるべきである。アの字形を考え合わせると、これは踊り字二字「ㄥㄥ」と見るべきである。すなわちアは「傷情」の、イは「損性」のくり返しである。

(2) 4行目のウ。国史大系本は「倫」と読むが、「倫屈」では熟語として意味をなさない。これは語の意味を考えて、さんずい偏の「淪」と判読すべきである。「淪屈」は落ちぶれて伸びられないという意。

德賢詞 羊席

木工 李昉 蘇敬隆

慈歎之者傷情一形早老苦辛一者之損性一
 氣先衰予倫一年久寧不傷情一凡瘁日積一豈
 不損性乎是故未及先同顏一子一夏一且先卅二類一潘郎
 騎一兒一辛一漸一過一佳一仕一之一迎一知一命一從一霜一成一雪一更一嚴一高
 白滿鏡一擗一亂一矣一訝一里一翟一鬼一絲一隨一梳一麗一飛一馬一似一離一離
 心一根一在一託一其一矣一予一之一衰一也一其一奈一老一自一今一仍一聊一祝一素一髮
 於一奈一花一連一絲一落一於一言一紫一心一
 聞一說一悲一人一騎一早一衰一不一行一年一也一我一年一之一老一滿一頭一添一皓一髮

(3) 5行目の工。国史大系本は「類」とするが、疑問である。まず字形から。字の左側は虫損によってほとんど欠けているが、なお左上に「・」という残画がある。「類」は同じ行の下から3字目にあるが、これによれば文字の左上に「・」という残画は残りえない。

次に対偶から考えてみよう。この前後は、

「未^レ及^ニ廿九、同^ニ顔子之

亦先^ニ卅二、類^ニ潘郎之鬢

という隔句対である。を「類」とすると「類」と「鬢」とが対語をなすということになるが、「類」という概念を表す語と「鬢」という身体の一部をいう語とでは、正しい意味での対語とはなりえない。「鬢」に対しては、同じく身体に関する語であるべきであろう。

また典故から考える。「未及廿九、同顔子之」（未だ二十九に及ばざるに、顔子の と同じ）は、『史記』卷六十七、仲尼弟子列伝の顔回伝の「回年二十九、髮尽白、蚤死（回年二十九にして、髮^{しつ}尽く白く、蚤^{はや}く死す）」を踏まえる。

以上の諸点から、国史大系本が「類」とする字は「頭」と判読すべきである。なお「頭」は10行目の下から4字目にもある。

(4) 6行目の才。国史大系本は「也」と読む。そうして

漸過^ニ強仕^ニ也。近^ニ知命^ニ。

と句点と返り点を付すが、語句の意味を考える必要がある。「強仕」「知命」はともに年齢を示す語である。「強仕」は四十歳（『礼記』曲礼）、「知命」は五十歳（『論語』為政）をいう。ともに年齢をいう「強仕」と「知命」とが近接して置かれていて、こども対句をなしているのではないかと考えられる。すなわち5—3と句切るのではなく、4—4と句切るべきであろう。

漸過^ニ強仕^ニ

也近^ニ知命^ニ

となるが、このままでは「也」が読めない。「漸」は副詞であるから、「也」とされている字も副詞であるはずで、その目で才を見直さなければならぬ。正しくは「已」である。図版^レ参照。これによって、

漸^ク強仕を過ぎ、

已^ニに知命に近し。

と読むことになる。

(5) 7行目の力。国史大系本は「然」。しかし、まず字形から見て疑問である。「然」は10行目の末尾にあるが、これと比べて、明らかに異なる。では何という字と考えるべきか。別の視点から考えてみよう。


b「已」

ここでも対偶に注目して、そのことが分かるように本文をあげてみると、

満鏡撩乱矣、訝黒翟之見

―随梳灑落焉、似皓鶴之振毳

となる。傍線を付した「然」と「毳」を除いた部分は、一見したところでも対偶をなしているようである。左右同じ位置にある文字は、2字目の「鏡」＝名詞と「梳」＝動詞（くしける）が外れるが、他は同じ性質の文字で、よく対応している。そうすると「然」と「毳」が問題である。どう考えればいいか。

まず機械的であるが、「然」を右の行に移して「見」の下に置くと、字数はそろつ。しかし、「然」と「毳」とでは字義の上で対応しない。「毳（鳥の腹毛）」の対語としては名詞でなければならぬ。「然」が字形としてもそうではないらしいことは先に確認した。

国史大系本が「然」と判読したものを名詞である文字として読まなければならないが、それを考えるには、当然のこととして、この語を含む文句の意味を考えなければならない。ところが、それを考えていくうえで一つ問題がある。ここに原本に誤写があるのである。ただし、先に述べたように、この作品は猪熊本のみにあるものであるから、他本と対校し

て正すという方法はとり得ず、この本文を熟視するほかないが、「黒」は本来「墨」であるはずである。つまり「墨翟」で、すなわち墨子であり、ここは墨子についての故事を踏まえているのである。『蒙求』に「墨子悲絲（墨子絲を悲しむ）」の句があり、注に「淮南子に曰はく」として、

墨子見練絲而泣之。為其可以黃可以黒

（墨子練絲を見て之に泣く。其の以て黄なるべく以て黒なるべき為なり）。

という。『淮南子』の「説林訓」に見える。墨子は白いままの糸を見て、染めようで黄色にも黒にも染まると泣いたという。これに基づく表現である。

結論として、これは「絲」である。図版C参照。


C.「絲」

なお、先に「―」が外れるが、他は同じ性質の文字で、よく対応している」と述べたが、これについて、ここで付言しておく。それは「墨翟」と「皓鶴」の対についてである。今述べたように、墨翟は人名である。それに対して、皓鶴は白い鶴、つまり動物である。人名と動物とは異質のものとなり、対語としてバランスを欠いているかに見える。しかしそうではない。墨翟はいわゆる懸詞なのである。翟は本来の意は鳥のきじ（キジ）。そうすると、これを修飾する墨は黒の意で、すなわち墨翟は黒いきじとなる。この意味でもある。

この意味の墨翟は皓鶴とびたりとした対語となる。

(6) 9行目のキ。国史大系本は「諸」。字形としてはそう読めるが、「怨諸」ではどう理解すべきか、疑問である。語の意味を考えて、原本の文字をもう一度見直すと、まずは言偏と見えるが、糸偏と見ることも可能である(図版d参照)。そうすると「怨緒」となる。怨緒は恨みの思い。紀齊名の「落葉賦」(『本朝文粹』巻一)に、「憂心恍然として、怨緒蕭然たり」の用例がある。

渚 仔

d「経」
下は

(7) 9行目のク。国史大系本はここに「尔」の字を置く。正字体は「爾」。そうすると「云尔(爾)」となるが、この云爾(「しかいふ」あるいは「いふことしかり」)は序、ことに詩序の結びとして常用の語である。したがって、この序でもこの語で結ばれていて何の不思議もない。むしろ当然である。国史大系本の校定者はそう判断したのだから、原本にはここに文字はない。虫損の跡は残るが、上の「云」と見比べて、ここにはもともと文字は書かれていなかった。この序は「云」という形で結ばれていた。

(8) 10行目のケ。国史大系本は「皤」とするが、これは「皤」と読むべきだろう。偏の「白」が「皤」という字体で書かれる例はある。図版e参照。

皓

e「皓」

「皤」と読むと「皤然」で、これは、ものの、ことに髪の色をいう。『和漢朗詠集』巻下、白に引く源順の詩に、

霜鶴沙鷗皆可愛 霜鶴沙鷗皆愛すべし

唯嫌年鬢漸皤然 唯嫌た少年鬢よっやの漸く皤然たるを

の用例がある。

以上の検討の結果として、猪熊本本文を原文に忠実に、行取りもそのままに翻刻すると次のとおりである。

なお、漢字の字体は「廿」「卅」「絲」以外は通行のものに改めた。蝕損によって文字が欠けている箇所は、で示し、残画から推測される文字は右に()に入れてあげた。また国史大系本の翻刻を改めた箇所は傍線を付した。

1 愁鬢詞 并序

木工助藤敦隆

2 愁歎之者傷情々々形早老苦辛之者必損性々

3 氣先衰予淪屈年久豈不傷情乎風痺日積豈

4 不損性乎是故未及廿九同顔子(之)亦先卅二類潘郎

5 之鬢況乎漸過強仕已近知命從霜成雪斑斑為

6 白滿鏡撩乱矣訝黑翟之見絲隨梳灑落焉似皓鶴

7 之振鬣甚矣予之衰也其奈老之至 仍聊祝素髮

8 於茶花述怨緒於言葉(云)

9

10 聞説愁人鬢早衰不行年悲哉年亦老満頭弥幡然

三

翻刻に基づいて、校定本文を掲げるが、その前に、詩の句
切りについて述べておかねばならない。（注）

第二節の初めに示したように、国史大系本は

聞説愁人鬢早衰

不行年悲哉

年亦老

満頭弥幡然

と句切りを施している。7・5・3・5の雑言詩と解したわけである。一見、意味を取るにもこれで差し支えはないようである。しかし、この句切りは詩の基本を見落している。詩は、いつまでもなく、韻文である。すなわち韻を踏む。ところが、この句切りはこれを無視していることになる。詩は押韻に着目して区切らなければならない。そうすると、次のようになる。

聞説愁人鬢

早衰不行年

悲哉年亦老

満頭弥幡然

五言詩である。「年」と「然」で韻（先韻）を踏んでいる。このことも加味して、序については対句の形がよく分かるように句形を整えて、校定本文を示す。

愁鬢詞 并序

木工助藤敦隆

愁歎之者 傷情 傷情形早老

苦辛之者必損性、損性気先衰

予淪屈年久、豈不傷情乎

風痺日積、豈不損性乎

是故、未及廿九、同顔子之頭

亦先卅二、類潘郎之鬢

況乎、

漸過強仕、

已近知命

從霜成雪、

変斑為白

満鏡撩乱矣、訝墨翟之見絲

随梳灑落焉、似皓鶴之振毳

甚矣予之衰也、其奈老之至何

仍聊祝素髮於茶花

述怨緒於言葉云。

聞説愁人鬢、

早衰不行年。

悲哉年亦老、

滿頭弥皤然。

このように形を整えると見えてくることがある。序の1行目の「者」の下に、次行の「必」と対応する副詞が欠けている。しかしそれが何であつたかは推測の手だてがない。それとも一つ、序の最終行の頭、「述」の上に、前行の「聊」に並ぶ箇所に、やはり副詞が欠けているかもしれない。ただし、これは前の場合ほど確かではない。ただ校定本文に基づいて訓読する。

愁鬢詞 並びに序

木工助 藤敦隆

愁歎の者は情を傷ましめ、情を傷ましむれば形早く老ゆ。苦辛の者は必ず性を損し、性を損すれば氣先づ衰ふ。予、淪屈して年久し、あに情を傷ましめざらんや。

風痺して日積もる、あに性を損せざらんや。

是の故に、未だ二十九に及ばざるに、顔子の頭に同じく、また三十二に先んじて、潘郎の鬢かみに類なふ。

況んや、漸く強仕を過ぎ、已に知命に近きをや。霜より雪と成り、斑変じて白と為る。

鏡に満ちて撩乱す、墨翟の絲を見るかと訝いぶかる。

梳づるに随ひて灑落さいらくす、皓鶴の毳を振るに似たり。

甚だしいかな予の衰へたるや、其れ老の至るをいかんせん。仍ちて聊ちか素髪を茶花とかに祝ひ、怨緒を言葉に述べと云ふ。

聞くならく愁人の鬢は

早く衰ふるも行年せずと

悲しいかな年また老いたり

滿頭いよいよ皤然はぜんたり

本論の目的は校定本文と訓読文を提示することである。語句の注釈や通釈には及ばない。

国史大系本には九つの翻刻およびそれに伴う句読の誤りがある。一首の作品にあつては多過ぎる。これは特殊な例かもしれない。しかし、活字本を用いるに当たつて、心すべき事実である。また翻刻するに当たつて、他山の石とすべき事柄である。

注

- 注 1 拙稿「『朝野群載』文筆部考―文体論の視点から―」（『国語と国文学』八二巻五号、二〇〇五年）
- 注 2 大阪大学大学院における演習での村山識君の指摘による。
- 注 3 このことは注 1 の拙稿でも述べたが、本文校定作業の一環として再説する。

(こくご) あきお・成城大学教授